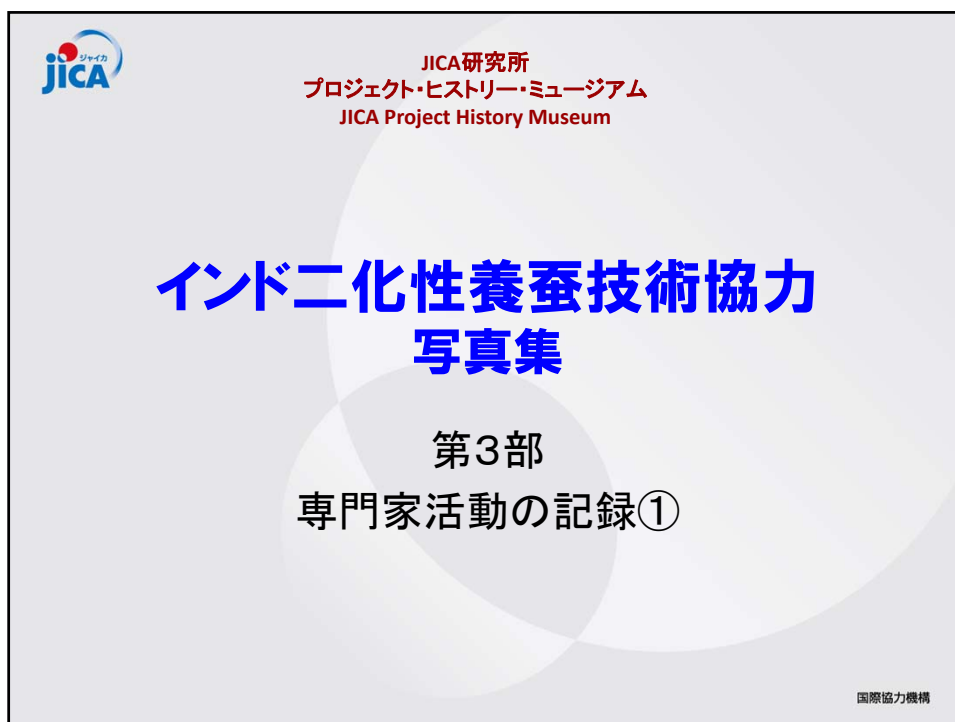






多化性生糸(左)と二化性生糸(右)。二化性の方がマユが俵型に近く、色が白いことがよくわかる。
(写真提供:河上清)

国際協力機構



桑の密植栽培の様子。南インドでは、ココナツ林に囲まれた日陰で、密集して栽培するのが昔からの桑栽培のやり方だった。(写真提供:河上清)

国際協力機構



二種類の二化性原種(CSR2(左上)とCSR4(右上))をかけあわせて、一代交雑種(下)の蚕種が生産される。交雑種には、親の優れた形質が引き継がれる。糸マユ生産農家は、この蚕種を使ってマユの生産を行う。(写真提供:河上清)

国際協力機構



インド繊維省中央蚕糸局(Central Silk Board)の本部ビル。バンガロールも都市化が進んで今やその面影はないが、この周辺は桑畑が多くあったところらしい。(カルナタカ州バンガロール、2011年6月山田浩司撮影)

国際協力機構



マイソールにある中央蚕糸研究訓練所 (Central Sericultural Research and Training Institute) の研修棟(左)と飼育棟(右)。JICAの支援で建設された。(写真提供:河上清)

国際協力機構



河上清プロジェクトチームリーダー。第2期の5年間、現地で技術協力の指揮をとった。首都デリーから遠く離れた地への日本人専門家のチーム派遣は、首都から近距離で行われる協力と比べて厳しいものであった。(写真提供:河上清)

国際協力機構



農村視察に出向き、現地の養蚕農家と対話する河上清プロジェクトチームリーダー。
(写真提供:河上清)

国際協力機構



農村視察に出向き、現地の養蚕農家と桑の栽培法について指導する山崎文幹専門家。目的地に着くと、すぐに桑園に向かった。その熱心さは、多くの農家の記憶に残っている。
(写真提供:山崎文幹)

国際協力機構



桑の株直しが行われた桑園。一列に植えられた桑は、地面から15cmほどのところで大きな拳ができるように剪定される。この拳から生えてくる枝の数を制御し、葉に養分が十分行きわたるよう工夫する。1株から生える枝は、3本程度に制限した。(写真提供:山崎文幹)

国際協力機構



枝が伸び始めた桑の木。(写真提供:山崎文幹)

国際協力機構



マイソールのCSR&TIの試験桑園。南インド特有の牛を使った牛耕が行われている。
(写真提供:河上清)

国際協力機構



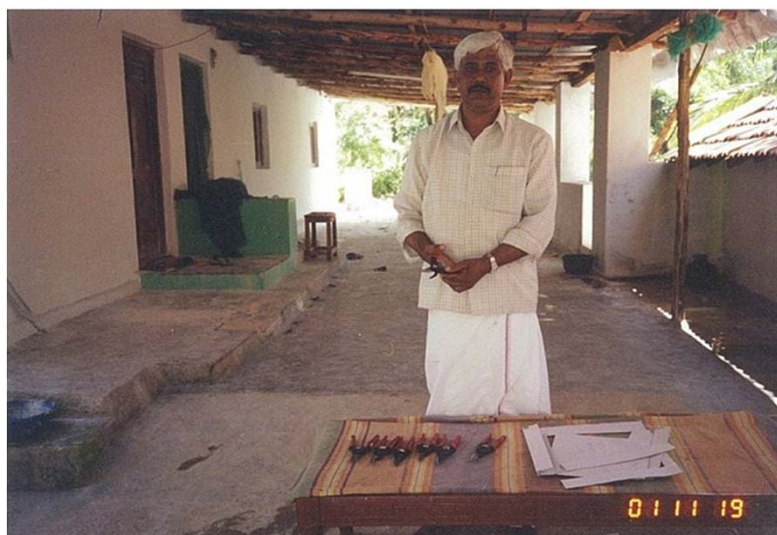
稚蚕用の桑の葉を裁断する女性。(写真提供:河上清)

国際協力機構



二種類の二化性原種(CSR2(左上)とCSR4(右上))をかけあわせて、一代交雑種(下)の蚕種が生産される。交雑種には、親の優れた形質が引き継がれる。糸マユ生産農家は、この蚕種を使ってマユの生産を行う。(写真提供:河上清)

国際協力機構



プロジェクトから剪定バサミの提供を受けたJICA選定農家。カルナタカ州トウムクール県トウルベケレのS.V.スワミー。日本製の剪定バサミは切れ味がよく、選定農家はもっと欲しいと日本人専門家に懇願したという。(写真提供:山崎文幹)

国際協力機構



山崎専門家の指導の下、剪定バサミを使った株直しを実習しているJICA選定農家。
(写真提供: 山崎文幹)

国際協力機構



カルナタカ州/バンガロール郊外で、伝統的な竹製の蚕箔に牛糞を塗る作業を行っている女性労働者。こうした蚕箔でカイコは飼育されてきた。(写真提供: 演野國勝)

国際協力機構



二種類の二化性原種(CSR2(左上)とCSR4(右上))をかけあわせて、一代交雑種(下)の蚕種が生産される。交雑種には、親の優れた形質が引き継がれる。糸マユ生産農家は、この蚕種を使ってマユの生産を行う。(写真提供:河上清)

国際協力機構



タミル・ナドゥ州エロード県ゴビチェット
パラヤムの州蚕糸局養蚕技術普及セ
ンターに掛けられていた消毒の重要
性を示すポスター。タミル語で書かれ
ている。よりよい収穫や所得の大前提
は消毒による清潔な飼育環境である
ことを示している。

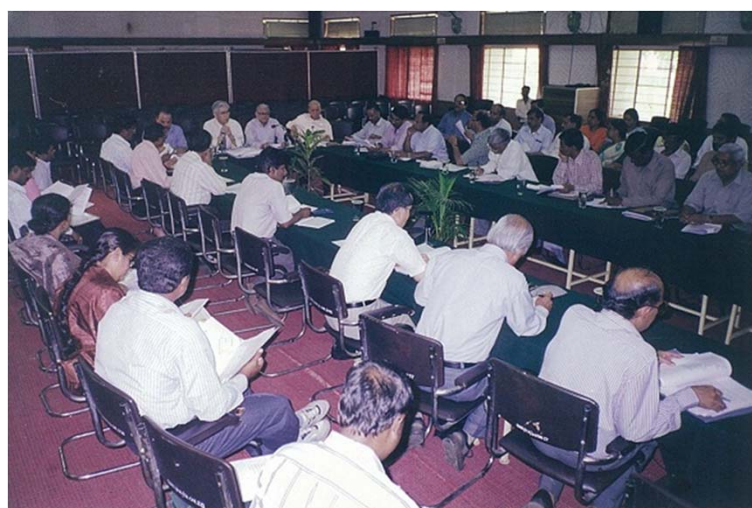
(2011年6月山田浩司撮影)

国際協力機構



動力噴霧器を使い、カイコ飼育棟の周辺の消毒を行う養蚕農家。(写真提供: 都田達也)

国際協力機構



プロジェクト第2期に導入された「ジョイント・ミーティング」の様子。CSB幹部と傘下の研究研修機関の所長、蚕種製造所長、選定地区の州蚕糸局事務所関係者、技術普及センターの普及員、日本人専門家とカウンターパートが参加。末端のスタッフであろうと、平等に発言する権利を保証し、意思決定を公開の場で行う透明性の徹底が図られた。(写真提供: 河上清)

国際協力機構



CSR&TIの試験桑園で働く作業員。研究員であるインド側カウンターパートに代わり、実際の作業を行うのはこうした人たちである。しかし、カウンターパートにも桑の生育状況など、現場の状況を逐一把握しておくことがプロジェクトでは求められていた。(写真提供：河上清)

国際協力機構



標高1,105メートルの「ヴィーラパン峠」からタミル・ナドゥ州側平野部を見下ろす。この地域はかつてヴィーラパンを頭目とする山賊が支配し、通行がままならず、プロジェクトチームは大きく迂回して7時間かけてタミル・ナドゥ州側事業地まで出向いていたという。(2011年6月山田浩司撮影)

国際協力機構



「ヴィーラパン峠」の州境付近の竹やぶ。今でも山賊が跋扈していそうなおうとした森である。ここからタミル・ナドゥ側平野部にたどり着くには、27個のヘアピンカーブを抜けないといけない。車酔いとの闘いでもある。(2011年6月山田浩司撮影)

国際協力機構



カルナタカ州内で開催された「啓発プログラム(Enlightenment Programme)」の様子。近隣の農村から養蚕農家とその家族が集まり、適切な桑の栽培、カイコの飼育法について専門家の話を聞いた。参加した農家にとっては、ふだん聞けない質問を直接政府に聞いてみる貴重な機会だった。(写真提供:都田達也)

国際協力機構



カルナタカ州マイソールで開催された「クリシ・メラ」と呼ばれる農業祭でスピーチする河上リーダー。「クリシ・メラ」には、蚕糸業に関連して消毒剤や蚕具などを扱う民間企業も出展し、最新の技術について情報交換できる貴重な場であった。(写真提供:河上清)

国際協力機構



二種類の二化性原種(CSR2(左上)とCSR4(右上))をかけあわせて、一代交雑種(下)の蚕種が生産される。交雑種には、親の優れた形質が引き継がれる。糸マユ生産農家は、この蚕種を使ってマユの生産を行う。(写真提供:河上清)

国際協力機構



プロジェクト第2期が終了する際、日本人専門家チームは各地のJICA選定農家をまわって最後の交流を行った。地元の養蚕農家からは、別れを惜しみ、日本人専門家に記念品が贈呈された。河上と養蚕農家との「3つの約束」は、こうした場で交わされた。(写真提供:河上清)

国際協力機構



プロジェクト第3期5年間にわたり、プロジェクトチームリーダーを務めた柳川弘明専門家。
(写真提供:河原畑勇)

国際協力機構



「啓発プログラム(Enlightenment Programme)」で政府側出席者に対して質問する養蚕農家。
(写真提供: 都田達也)

国際協力機構



プロジェクト第3期中、タミル・ナドゥ州サティアマンガラムで開かれた農民グループディスカッションの様子。(写真提供: 河原畑勇)

国際協力機構